2012 2・26

釜石港湾口防波堤復旧工事

（5海プ）

釜石港の湾口防波堤は、三〇年の歳月をかけ、二〇〇九年に完成した。長さが九九〇メートルの北堤と六七〇メートルの南堤からなり、六三メートルの深さは世界最大水深である。港内水位を防潮堤上端部より低く減衰させることで、津波を防ぐ仕組みとなっている。

三・一一の震災時、釜石沖約二〇キロメートル地点における波浪計の計測データから、もし湾口防波堤がなかった場合、沿岸部では高さ約一三メートルの津波が襲来するというコンピュータ解析結果が出た。実際の沿岸部における浸水高は、実測で七～九メートルである。つまり、湾口防波堤によって最大約六メートル津波の高さを抑えることができ、時間にして六分到達を遅らせることができたとの分析がなされている。

古くから海洋構造物を手がけてきた海洋部門と日鉄トピーブリッジ㈱では、震災直後の三月二二日から現地入り。被害や津波のデータを調査・分析し、復旧に向けた提案を国土交通省に行なってきた。

震災前は中央の開口部以外は防波堤の頭の部分が水面に出ていた。

防波堤は、ハイブリッドケーソンと呼ばれる高さ二〇・五メートル、長さ五〇メートル、幅二二・五メートルの巨大なコンクリートブロックを並べてつくる。当社グループは南堤のケーソンの骨組みとなる鋼殻製作と外周コンクリートの施工を担う。

約七割のブロックが破壊された湾口防波堤復旧工事の着工は二〇一二年の二月二六日。さまざまな改良が施された形で、二〇一六年の完成を目指している。

2011 4・10

石巻ガス㈱ガス製造設備復旧工事

（6工）

どうしてオレなんだ？

最初は戸惑いが大きかった。だが、自衛隊車輌が行き交う東北自動車道を北上する頃には、本田の気持ちは変わっていた。やるしかない。東京・大崎の本社から東北支店に辿り着いたのは七時間後のことである。本田は翌日の調査に備え、真っ暗なオフィスの冷たい床で、寝袋にくるまった。

工事担当の本田

翌三月一九日、本田は同伴したエンジニアと二人で、石巻ガスのプラントを訪ねた。タンクローリーで運び込んだ液化天然ガスを気体へと戻す設備や、配管・タンクの被害状況などをつぶさに調査する。被害の大きさを目の当たりにして、二人の結論は一致していた。本格復旧には最低一年はかかるだろう。

「いつ、ガスを流せる？」

一階が津波に流された社屋の二階で、石巻ガスの青木社長は本田らに尋ねた。約一万世帯が風呂にも入れない生活を強いられ、大型病院への供給も停止している。仮復旧というかたちでも、早くガスを流さないといけない。本田の中で、経験のない復旧工事への不安よりも使命感が勝った。

「社長、三週間ください」

「わかった。一日でも一時間でも早く、ガスを流してほしい」

●

資材調達～県との協議～工事を三週間で終えるのは、自分一人では無理だ――。本田は関係部署に、協力要請のメールを送信した。

「私は行けます。やりましょう」

すぐに返信をくれたのは、先輩の安部だった。石巻ガスでの工事経験もある、心強いパートナーだ。現場に駆け付けた安部を、

工事担当の安部

事の際、先輩社員たちが残してくれたものだった。この図面と、衛星写真を組み合わせることで、おおよその距離が推測できる。こうして、必要となる管の長さを割り出すことに成功した。

手配するのは、一二メートルの管、一五本である。該当するサイズと必要量はすぐに浦安の倉庫で見つかったが、液状化の影響で車輌が立ち入りできない。そこで、関西地区の倉庫をあたり、トレーラー三台で釜石まで運搬することにした。計画着手から四日目、必要な資材を揃え、大場は泉と現地へ向かった。

●

変わり果てた釜石の姿に、二人はただ言葉を失っていた。あいさつに訪ねた下水道課の事務所も、一階部分が流されて見る影もない。現場の周辺では来る日も来る日も、大勢の被災者が家の片付けにやってきて、日暮れと共に避難所に帰っていく光景が見られた。

夜中に二〇回も余震がある。地鳴りのような音になんども起こされる。そのたびに、「現場は大丈夫だろうか」と大場は思った。復旧にあたっている、多くの人の努力をムダにはしたくない。

この工事では、現地の状況把握後の工事スピードを考えて、管の加工は現場となる釜石で実施する計画だった。山形からやってきた四人の溶接工が、九〇度に曲げる曲管を製作した。

そのための用地は、新日本製鐵㈱から、製鉄所内の一画を無償で借りることができた。日鐵物流㈱は、手配が困難なクレーン車などの重機を確保してくれた。多くの人による支えで生きていることを大場は感じた。

彼自身もまた、無事だった親戚の家をホテル代わりにして、毎日現場へと通っていた。

●

原型復旧なら一年はかかるところを、橋の歩道部での仮設置という計画を立て、グループ力で迅速な施工を実現した。そのことが認められ、このプロジェクトが国土交通大臣賞を受けたのは約半年後の、秋のことである。光栄なことだが、大場たちにとっては、自分たちの仕事を当たり前にしたにすぎない。

大場はむしろ、正月に釜石の親戚を訪ねたときに、工業高校時代の友人たちから言われた一言が嬉しかった。

「あの橋に乗っかってる管、お前がつくったんだよな」

工事を終えてトンボ返りしたときの、胸のつかえが少しとれた気がした。釜石の地に残った友人たちが復興のバトンを持って、いまも走り続けている。

募金を通じた被災地支援

高橋社長の第一声「日本を元気にしよう！」に賛同した当社グループの社員・関係者が、被災地で緊急支援活動を行う公益社団法人Civic Forceへの募金活動を開始したのが震災直後の三月一七日。寄せられた募金は、一五、四九一、八五〇円に達しました。

その後も、石巻を中心に活動するNPO法人オンザロードや、釜石復興のシンボルである地元ラグビーチーム、釜石シーウェイブス（SW）を支援するために、役員が次々と立ち上がり、設定した目標に向けて自らもチャレンジを行なうことで、賛同者に募金を呼びかけました。

「本社から釜石までの531km（相当）を3ヶ月で踏破する」というチャレンジを掲げて、釜石SWへの募金を呼びかけた羽矢相談役。目標達成時には、釜石陸上競技場で子供たちと一緒にゴールテープを切りました。

音楽が趣味の山田常務（当時）は、釜石SWの応援歌を作詞作曲。お披露目を兼ねたチャリティーコンサートには、約200人の社員・関係者が集まりました。

※当社の募金活動は、海外からも参加できるウェブ上のファンドレイジングサイトJustGivingを活用しています。

2011 5・20

登米市民病院南館耐震補強工事

（7工）

登米市民病院は昭和二五年の開院以来、医療サービス向上のために増築や改修を重ねていた。その一環として新日鉄エンジニアリングが担当していたのが、南館病棟の耐震補強である。その工事の終了直後に、震災は起きた。

登米市は震度六強の激しい揺れに襲われたが、南館には大きな損傷もひび割れも認められなかった。当社商品のアンボンドブレース（鋼製の筋交い）は建物をがっしり守り、なにより、職員と患者の人命を守ったのである。

隣接する自治体の医療施設が壊滅的な被害を受けた中、被災者の受け入れ先として本病院は機能することになった。被災地の医療に果たした役割は、図り知れない。

地震後にはエンジニアが建物の振動調査を行い、補強効果をあらためて数値化し、五月二〇日に正式竣工となった。病院職員のあいだでは、こんな合言葉が交わされている。

「地震が来たら南館に！」

2011 12・24

㈱伊藤製鐵所石巻工場復旧工事

（8鉄）

大晦日まで一週間と迫ったこの日、前日から試運転を行っていた製鋼工場が通常操業を再開した。約九か月半ぶりに、同工場は震災前の状況を取り戻したのである。

震災と津波によって工場